

- ・ アリソン・パウリネリ元農務大臣
- ・ マウリーシオ・アントーニオ・ロペス長官をはじめとする Embrapa の皆様
- ・ 那須 所長をはじめとする JICA の皆様
- ・ 本セミナーにお集まりの皆様

はじめに、“Development for Sustainable Agriculture, the Brazilian Cerrado”の刊行及びそれを記念した本セミナーが、日伯両国の政府、本書の執筆者の皆様、その他セラード開発に携わった多くの方々の参加を得て、このように盛大に開催されることを心からお祝い申し上げます。

私からは、プロデセールをはじめとする日本とブラジルの農業分野の協力、これからの日伯農業協力の重要案件である「マトピバ地域開発」、及びアグロフォレストリーの三点をお話しさせていただきます。

まず、第一に日本とブラジルの農業分野でのこれまでの協力に関してです。

日本とブラジルの農業分野での協力は多岐にわたり、特筆に値する成功例であると考えます。

まず第一に、日本人移住者とその子孫によるサンタカタリーナ州等でのリンゴ（フジ）やナシの栽培、サンパウロ州や、ココブラジリア近郊等における野菜や果物の栽培は、ブラジル国民の食生活を豊かにしました。

そして、日本とブラジルは、不毛の地と呼ばれたセハードの農業開発に共に取り組み、成功させました。今やブラジルはゆるぎない世界有数の農業大国です。セハード開発の成功は人類の財産であり、この貴重な経験をできるだけ多くの国の人たちに共有し、世代を超えて伝えていくことは、我々の責務と考えます。

セラード農牧研究センター（CPAC）の方々に一言申し上げます。昨年11月、秋篠宮同妃両殿下が当センターを訪問されました。皆様には、両陛下を温かく歓迎いただきました。また、当センターの敷地内には、80年代初めにセハード開発に命をささげた日本人、小林正人氏を偲ぶお墓と公園が、現在もきれいに整備・管理されています。このことは農業分野における日伯協力の歴史を大切にするブラジル側関係者の温かい思いの表れであり、心から感謝申し上げます。

第2点目として、これからの日伯農業協力である、マトピバ地域の開発について述べます。「マトピバ地域」は、農業生産増加の大きなポテンシャルを有する世界でも数少ない地域です。そして、「マトピバ地域」の開発はブラジルの将来にとって非常に重要であるのみならず、世界の食料安全保障という観点からも大きな意義を有しています。

今週月曜日（2月29日）に、トカンチンス州のパルマスにおいて、アブレウ大臣のイニシアティブによって「日伯農業・食料対話」が盛大に開催されました。マトピバ地域の開発が主要テーマであり、ブラジル側からは、アブレウ大臣に加えて、マトピバ4州から3人の知事と1人の副知事が出席されました。日本側からは、松島 農林水産審議官に加えて、日本企業約30社、約70名が参加し、マトピバ地域の開発に向けた日伯両国の協力に関する覚書に署名いたしました。今後、協力の具体化に向け尽力したいと考えます。

また、29日夜に開催されたレセプションでは、和牛がブラジルで初めて提供されました。また、大きなサプライズとして、アブレウ大臣と2名の女性職員の方が着物で参加され、レセプションの場は、一瞬にしてアブレウ大臣ファンクラブのレセプションとなりました。

三点目とし、日伯農業協力の今後のテーマとして、パラ州トメアスで行われているアグロフォレストリーを提案させていただきます。

アグロフォレストリーは、日系人が JICA 及びエンブラーパと協力して、数十年にわたる試行錯誤の末完成させた農業生産システムです。

ブラジルでは、2010年に国家統合省の第1回地域開発大賞を受賞しています。日本では、アグロフォレストリーで生産されたアサイーは大人気商品となっています。

アグロフォレストリーは、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」が提唱する「Green Ecology」や「持続可能な農業」の考え方に合致し、ブラジルが世界に誇れる素晴らしい農法であると考えます。

現在、アグロフォレストリーの実施面積は限られていますが、この生産システムを更に進化・拡大させることができれば、自然環境の保全と農業生産の両立という観点からも大きな意義を有します。

最後に、本書の刊行が、日伯農業協力が更に進化する上で、有益な契機になることを祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

2016年3月3日 駐ブラジル日本国大使 梅田邦夫